マニフェスト・デスティニイ

——十九世紀末米國太平洋政策の一原動力について——

今津晃

一　問題の提起

一八九八年の米西戰爭が米國民史上に於てのみならず世界史的に注目すべき事件であつたと考へられる所以は、それが米國の世界政策への機點であつたといふところにのみ絶對的意味があるのでなく、一つには其の戰爭が英米關係史上に於ける轉機を劃し爾後の米國の帝國主義的諸政策が英米の友好關係——極言すればアングロ・サクソンの連帶——を其の背景として強行せられたといふ點に重大な意義が在るのである。國際政治に於ける斯かる傾向は、爾後の諸時代の特殊な制約の下に、其の內容に若干の相異を生ずるにしても、少くもそれは今日の世界史の動向になほ一脈相連なるものを有するのである。英米間の融和を促進し其の基盤の上に米國帝國主義政策を強行せんとする思想は、一八九〇年代の初頭マハンに於て代表せられ其の末年ヘイに於て確立せられ實行に移されたところであるが、斯かるマハン—ヘイ系列の思想の成果こそ、「宇宙的傾向（"Cosmic Tendency"）」の名の下にカリブ海と太平洋とに對して強行された米國の劃期的な一聯の膨脹政策に他ならなかつた。[1]

英米の融和と米國帝國主義の強行といふ國際政治に於ける新しい二つの傾向の出現と共の不可分性、かゝる事實は米國「強外交」への考察が十九世紀末・廿世紀初頭に於ける國際情勢そのものゝ中から試みられねばならぬ

ことを示すものである。殊に英米の合作が、英米兩政府の主要課題とせられたといふことの中に、曾に歐洲大陸列強の米國の發展に對する壓力の問題のみならず、英と米との國家權益の追求に於ける烈しい對立(又は一致)が觀取されねばならぬのであつて、米國の對極東・對中南米政策が米國民史的立場のみからしては把握しえられないことは論を俟たないところである。

併しながら、一八九八年に米國が世界政策に入つたといふ事實は、そこに當然、米國的發展といふことゝ十九世紀末的米國とゝふ特殊事情とを考へしめるものである。例へば、一八九七年に於ける對支貿易は其の全貿易額の一・七%(香港貿易を入れゝば二・二%)であつたが、其の年の對支輸出額は恐慌の恢復した年、卽ち其の前年一八九六年の額の二倍近くであつたといふことが、恐慌は二、三年で恢復したし限りなき未來のエクスパンションの可能性が其處に意味づけられてゐると米國人には考へられた。少額であるとはいへ、一年にして其の對支輸出額が倍近くになつたといふことが、米國發展の特異な在り方からして、其の膨脹思想に強く訴へたのである。つまり、建國以來(更には新世界への植民以來)、殆んど所謂「プログレス的發展」の一路を辿り南北戰爭後に更に著しい國內發展を遂げた米國、而も十九世紀の末年にかのフロンティアの消滅を見た米國に於ては、二%の對支輸出額といふことは、米國發展史がその中に包含された所謂「十九世紀末の米國的意味に於ける二%」であつたといふ特異な歷史的事情を反映してゐるのである。コロンブスが發見したアメリカは地理上の新世界であつたが今日それは歷史上に新世界であり吾等はそれを再發見せねばならぬといふシーグフリードの訓言を思ひ、新世界の名にふさはしい米國的發展に想倒する時、吾々は世紀末米國の世界政策の原動力として當時の世界史的風潮といふ要因の有つ意義を充分に認めつゝもなほ、米國的特殊な要因に注目せざるをえないのである。本稿に於て取り上げんとする問題も、かゝる特殊的、米國的問題に他ならないのである。

此の廣大なる北米大陸に膨脹・發展し無明の民をして

文明の恩澤に浴せしめることは神自らが米國民に課し給うた道義的使命の不可避的遂行にして明白な運命である、といふ米國民の限りなき自特と野心とのドグマ、マニフェスト・デスティニイ(Manifest Destiny)の思想が、十九世紀に於て大西洋と太平洋とに跨る一大大陸國家形成の重要な因力となつたことは、今さら贅言を要するまでもなく、古來、幾多の史家の一様に之を認め來たつたところである。其の一例をあげるならば、一九三一年五月、カリフォルニア大學のパリッシュ教授(Prof. J. C. Parish)は"The Emergence of the Idea of Manifest Destiny"と題する特別講義(其の講義案は同大學より出版さる)に於て、「西の方、太平洋岸への米國の前進の一原動力はマニフェスト・デスティニイの思想であり(P. 1)善かれ悪しかれ此の思想はアメリカ生活の中に鞏固な根を張るに到つた(P. 23)」と論斷してゐる。其の他、吾々は幾多の米國史關係の書物(其の大半と言つてよい)に於て、右の思想が米國の大陸發展の推進力であつたことを見出すのである。

然らば、十九世紀に於て太平洋岸への膨脹のスローガンとなつたマニフェスト・デスティニイの思想は、世紀末米國の太平洋政策(特に、ハワイ併合、フィリッピン領有の問題)の中に如何に働きかけてゐるであらうか。バファロー大學のプラット教授(Prof. J. W. Pratt)は一八九〇年代の思想傾向を解して"New Manifest Destiny"なる名稱を用ひたが、[2]「新しいマニフェスト・デスティニイ」とは一體いかなる思想的内容を有つものであり、如何に帝國主義強行の思想的地盤をなしてゐるであらうか。而して更に右の問題に附隨して、マニフェスト・デスティニにイは如何なる限界——從つて如何なる歷史的批判——が存するのであらうか。斯かる二つの問題に答へるために、卽ち右の思想の展開と限界の探究に資するために、以下われ〳〵はマニフェスト・デスティニイの思想の出現は如何なる歷史的背景を有するかといふ問題から出發しようと思ふのである。

【註】

(1) 英米關係と米國帝國主義との關聯の問題については「西洋史

說苑」第三輯に掲載の筈の拙稿「米國帝國主義の動向と國務卿ジョン・ヘイ」を參照されたし。

(2) S. W. Pratt, The Expansionists of 1898, 1936, P. 1.

二　マニフェスト・デスティニイの思想の起源

"Roaring forties"の名によつて知られる如く、一八四〇年代は米國民發展史上に於ける一つの劃期的な時期であつた。殊にポルク (J. K. Polk) を其の大統領とする四五年—四八年の三ケ年に最も華やかな劇が演ぜられた。卽ち、米國は四五年にテキサスを併合し、四六年にオレゴンを占有し、更にメキシコと一戰を交へて四八年にカリフォルニアを含む其の領土の五分の二を奪ひ、西の方、太平洋岸にまで領域を擴大して、外形的にではあれ始めて海から海に跨る一大大陸國家の態勢を整へたのである。マニフェスト・デスティニイといふ魔術的な言葉は實に此の時代の産物であり、其の思想は此の時代の國民的自覺の一表現であつたのである。マックス・ファランドも一八四〇年代を解して、『國土を開發せよ』は前時代の標語であつたが、今や時代のスローガンは『膨脹の天命』(マニフェスト・デスティニイ) となつた」と言つてゐる。[1]

勿論かゝる思想は四〇年代に忽然として出現したのではなく、其の萠芽は遡つて建國時代にあり、フランクリン、ジョン・アダムス或はジェファソン等の諸見解の中に之を明白に窺ひうるところである。かくの如き長い思想的系譜を有するが故にこそ、其の善惡は兎も角、マニフェスト・デスティニイの思想は米國史上に鞏固な根を張りえたと言へるのであるが、併し、四五年—四八年の特殊な歷史事情と、其の時代に始めて此の言葉が創られ其の思想が巨火と燃え上つたことゝに於て、マニフェスト・デスティニイは米國史一般に於けるよりも寧ろ一八四〇年代的な時代思想として把握さるべきであると考へられるのである。

本稿一、に擧げたパリッシュ敎授の特別講義は、建國時代に於ける大立物達の思想の中に如何にマニフェスト・デスティニイの思想と言葉との先驅が存するかに就いて興味ある例證を提供してゐる。また同敎授は、「マニフェスト・デスティニイの

思想は十九世紀中葉までは此の言葉を以て現はれなかつた。併しながら、其の源は遙かに古く米國史の初期にまで遡る」(P.1)と述べて、「此の思想が實際にあらはれたのは十八世紀であること」(pp. 2—3)の解明に力點を置いてゐる。明らかに、マニフエスト・デスティニイの思想に示される如き膨脹主義は啻に一八四〇年代に限られたものでなく、より廣く米國史一般更には新大陸に移入された歐洲的傳統の中にも存すると言へるであらう。併しながら、歐洲的傳統と米國的地理、それに一八四〇年代の時代的性格が組み込まれ、新たにマニフエスト・デスティニイなる言葉の出現を見たといふことに於て、右の思想の有てる時代性を察せしめるのである。

マニフエスト・デスティニイといふ言葉が議會に於て始めて用ひられたのは、一八四六年一月三日、マ州出身の代議士ウインスロップ (Robert C. Winthrop) がオレゴン問題に關し下院に於て試みた演説に於てゞあつた。彼は次の如く述べてゐる。

> オレゴンに對する吾人の要求には一つの大綱がある……卽ち予の言ふのは、此の大陸全體に膨脹する吾人のマニフエスト・デスティニイの權利と稱せられる新しい權利の示現のことである……[2]

ところでウインスロップの右の言葉とまさしく一致する言葉が彼の演説の一週間前、一八四五年十二月廿七日のニューヨーク朝刊の社説に現はれてゐる。卽ち、

> オレゴンに對する吾人の要求は、自由と聯邦の自治といふ偉大なる實驗を押し進めるために神が吾々に與へ給うた此の大陸全體に膨脹しそれを掌中に收めるといふ吾人のマニフエスト・デスティニイの權利によるものである。[3]

之によつて觀るに、議會に於て始めてウインスロップの口を通して語らしめたマニフエスト・デスティニイなる言葉の出所は、明らかに此の社説にあるのである。だが、此の言葉が此の時に始めて使用されたと斷定するは早計である。ニューヨーク朝刊の主筆O・サリヴァン (John L. O'Sullivan) は當時、月刊雜誌「民主黨評論(デモクラティック・レヴュー)」の主筆を兼任してゐたが、彼は一八三九年十一月に "The Great Nation of Futurity" と題する論説に於て、マニフエスト・デスティニイなる言葉を暗示することによつて、神の恩寵を受けた米國民の立つべき床こそは西半球であることを高唱したのである。[4] 而も其の後五年を經過して、一八四五年七月—八月の特輯號に於て、此の雜誌は始めてマニフエスト・デスティニイなる言葉を用ひた。

そして、それが此の言葉の使用された最初であつたと推定されるのである。卽ち、同誌はテキサス併合のための煽動的論文を掲載し、併合の最後決定に未だ躊躇してゐた諸見解を論駁して、

> 年々增加し行く人口の自由なる發展のために神が吾人に與へ給うた此の大陸に膨脹せんとする吾人のマニフエスト・デスティニイの遂行[5]

を絶叫したのである。つまり、マニフエスト・デスティニイなる言葉はO・サリヴアンが作成し議會に於てウインスロップの引用するところとなつて始めてポピュラリティを有したのである。

然らば、一八四五年七月—八月の「民主黨評論」に現はれた此の言葉が世の注目を惹かずして、其の約半年後、四五年十二月のニューヨーク朝刊に掲載された言葉が議會に採り入れられ、膨脹論者達のスローガンとなつたのは何故であるか。こゝにマニフエスト・デスティニイの思想が其の有する普遍性を認められつゝもなほ米國史一般に於てゞなく時代性に於て捉へられるべき所以の一端が存するのである。要するにそれは、第一の場合に於けるマニフエスト・デスティニイは實際上解決濟みの問題、つまりテキサス併合に關して使用されたため華々しい效果をあげなかつたのであり、第二の場合に於ては、それは其の頃あだかも燃え盛つてゐたオレゴン占有可否の問題を繞つて直接ウインスロップによつて議會に採り入れられたがためにポピュラリティを有したのである。つまり、マニフエスト・デスティニイの巨火はテキサス問題解決後さらにオレゴンを占有しカリフォルニアを獲得して太平洋に臨む continental power となる過程を完遂するための、一八四〇年代的、特殊的な問題を最大の契機として燃え上つたのである。「是等の吾隣邦に對し神の諸目的によつて定められたマニフエスト・デスティニイを遂行するに急なることこそ米國人の義務であるといふ信念は、終始一貫して數多くの演說者達の抱いてゐたところであつた」といふ當時（一八四八年一月）の the Niles' Register の世評は、[6]「神が米墨兩國に將に與へんとするあのデスティニイ」といふ時の大統領ポルクの言

と相俟つて、[7] 當時の世相を如實に指示したものと言へるであらう。

米國史に於て一八四〇年代が注目される所以は、此の時代に二つの理想、領土擴張とデモクラシイとが結合するに至り、それが米國人をして國家の運命に對する自覺を新たに鞏固ならしめた點に存する。初期に於ては、デモクラシイの發展と國境の擴大との間には必ずしも密接な關係があるとは思はれなかつた。寧ろ領土擴張はデモクラシイの實現に危險であるとさへ考へられた。ルイジアナ買收に對する强硬なる反對勢力の存在は其の一例であらう。だが、爾後の米國史は徐々に斯かる思想の薄らいで行く過程を踏んだ。そして、一八三〇年代に到つて遂に二理想の結合の形態が現はれて來た。所謂 "Jacksonian Democracy" として人口に膾炙する時代がそれである。併しながら、此の時代に於ても、二つの理想は完全には一致を見なかつた。大統領ジアクソンの引退演說の中には、此の時代が自足 (self-sufficiency) の時代であつたことが示されてゐる。[8] 然らば、何故四〇年代にデモクラシイと領土擴張との二理想が堅く結合し、それがマニフエスト・デスティニイなる言葉をすら創作して時代の推進力となつたか。テキサスの獨立後、七年間も之に冷膽な態度を示してゐた米國が、四五年に至く自發的に其の併合に乘り出したといふことが考へられうるであらうか。否、それは、當時に於ける國內のエネルギーの外への發露——勿論それは一大要因であるが——といふ事實の外に、四〇年代に於ける歐洲列强の脅威、特にオレゴン問題を繞る英米の紛糾、といふ共の時代獨自の對外關係にも由るのである。

米國では歐洲列强特に英佛がテキサス、オレゴン、カリフオルニアに侵出して主權を確立しはせぬかと懸念された。それはタイラーやジャクソン各大統領のメツセヂ又は書簡の中に窺はれる。なるほど右の地方への英佛の企圖は存しはした。併しながら、英佛に對する米國の危惧の念は必要以上に大であつて、云はば想定的なものに近かつた。蓋し、英佛の侵出の企圖は、寧ろ米國の不斷の膨脹慾を抑止せんとする防禦的、消極的なもので、其の立場に於て主客轉倒の觀があるからである。(特に英國が右の諸地方への企圖を放棄せざるをえなかつた理由については、R. G. Adams, A History of the Foreign Policy of

the United States, 1925, Chap. XI. 參照)

從つて、四〇年代の膨脹主義は一つには北米への歐洲列強の侵入を抑へんとする防禦的努力としても勃興したのである。曾て聯邦の存在は領土擴張によつて危殆に瀕すると考へられたが、逆に四〇年代には聯邦は領土的にエクスパンションしなければ重大なる事態に直面すると懸念されるに到つたのである。要するに、一八四〇年代は "roaring forties" の名のふさはしく目ざましい出來事の時代であつた。太平洋への膨脹は米國民の夢想に訴へ、米墨戰爭は彼等を奮起させ又カリフォルニアの金鑛發見が多大の興奮をもたらしたといふ異常な時代であつた。而もかゝる國家の夢想と精力とが對外關係の緊張を內に含んで、西へ〳〵の運動を奔流の如くに怒濤せしめたのである。洵に、四〇年代の米國人にとつて、西方の土地こそは自己及び自國の運命を左右する鍵そのものであつたと言はなければならない。ジョン・ホプキンス大學のワインベルグ講師 (A. K. Weinberg) も、「米國人が自分に直接の關係を有しないアメリカ外世界に對して無關心であつたこと四〇年代ほど甚だしきはない」と言つてゐる。(1) 而も此の時にマニフェスト・デスティニイといふ言葉が創られ其の思想が時代の推進力となつたといふ事實は、其の有する時代性を認めざるをえざらしめるのである。デモクラシイと領土擴張、此の二つの理想が完全に結合した "roaring forties" の特殊な歷史を背景にしてこそ、始めて、建國以來脈々と流れ來たつた膨脹思想は「マニフェスト・デスティニイ」として完成され、確乎たる國家的信條の一項として米國人の心的領域の中に大きな地位を占むるに至つたのである。

【註】

(1) マックス・ファランド著、名原・高木兩氏譯「アメリカ發展史」下卷一頁。

(2) J. W. Pratt, The Origin of "Manifest Destiny" The American HIstorical Review, 32, P. 795.

(3) Pratt, op. cit, P. 796.

(4) Pratt, op. cit. P. 797.

"The far-reaching, the boundless future will be the era of American greatness. In its magnificient domain of space and time, the nation of many nations is **destined to manifest**

to mankind the excellence of divine principles."

(5) Pratt, op. cit., P. 798.

(6) A. K. Weinberg, Manifest Destiny, 1935, P. 175.

(7) ポルクの日記の中の一節 (Cf. Weinberg, op. cit., P. 174)

(8) Andrew Jackson, Farewell Address. Richardson, Messages and Papers of the Presidents, Vol. IV, P. 1517, P. 1526.

(9) Weinberg, op. cit., P. 124.

三　マニフエスト・デスティニイの思想の展開

以上に於て考察した如く、マニフエスト・デスティニイの思想は一八四〇年代に所謂「北米大陸の米國化」の推進力として太平洋岸への發展の原動力となつたのであるが、果してそれは爾後の米國發展史上に如何なる役割を演じてゐるであらうか。

それは九〇年代に返り咲くまで半世紀の間、日蔭の花として陽の目も見ずに萎れてゐたのである。マニフエスト・デスティニイの言葉の作者と推定されるO・サリヴァンは、著名なジァーナリストとして或は活動的な外交官として米國の膨脹運動に極めて貢獻したのであつたが、其の彼が內亂後はヨーロッパに追放せられ、過去の名聲とは餘りにも著しい對象を示して、一八九五年三月の末つ方、ニューヨークの一隅に於て知る人もなく淋しく此の世を去つた。或は又マニフエスト・デスティニイの名に於てカリブ海又は太平洋への膨脹政策を強行せんとしたシュワード (W. H. Seward) やグラント (U. S. Grant) の努力も殆んど民衆の支持を受けずに終つたのである。所謂「シュワードの夢」はアラスカの買收によつて其の一少部分は實現されたけれども、夢は夢として餘りにも果敢なく、夢が實現されるのには彼の薫陶を受けたヘイの登場するまで約四〇年を待たねばならなかつたのである。

併しながら、歲月は日々に疎くO・サリヴァンの名は一日々々と人々の口から遠ざかつて行つた間にあつて、歷史は再び繰り返し、彼の作成したあの言葉は其のまゝに時代のスローガンとして返り咲いたのである。一八九三年に反帝國主義の領袖として著名であるかのカール・

シュルツ (Carl Schurz) は "Manifest Destiny" と題する論文に於て、「今やマニフェスト・デスティニイの新しい型が勃興したと述べ、當時の思想傾向に對して嚴しい批判を下した。[1] また其の前年の六月七日、ミネアポリスに會した共和黨の人達は、「最廣義に於けるアメリカ共和國のマニフェスト・デスティニイの遂行」といふ言葉の中に彼等の信念を披瀝した。[2] 更にまた九三年にハワイ併合を論じたフィラデルフィア新聞は、「吾人のマニフェスト・デスティニイは完遂さるべきである」旨を高唱した。[3] マハンが

> わが幼年期に於ては、我々は大西洋にのみ境を接してゐた。青年期に於て、我々は國境をメキシコ灣にまで押し進めた。今日、壯年期に於て、我々は太平洋上に在る。(然らば)更に何らかの方向に發展せんとする要求又は權利なるものを今や我々は有たないのであるか[4]

といふ言葉に於て強烈な膨脹主義を唱導したのは恰も此の時、ハワイに革命の火の上つた時であつた。

かくの如く、九〇年代に到つてマニフェスト・デスティニイの旗は再び鮮明に米國の空が飜つたのである。だが、こゝに注目すべきことは、今や世相移り人は變つて、其の主唱者は曾ての O・サリヴァンら一派の民主黨の中にはなく、彼が「邪惡にして物狂はし氣な共和黨主義」("wicked and crazy Republicanism") と呼んだ思想を信奉する反對黨であつたことである。[5] そして、マニフェスト・デスティニイといふ continental expansion の思想を代表する合言葉そのものによつて oversea expansion が主張されてゐるといふことであつた。つまり、シュルツの言ふ如く、海上權力の確保に進む新運動への反對は凡べてこれ「運命に双向ふ一個の抗爭」であるとさへ考へられるに到つたのである。[6] かくして、四〇年代に於けるマニフェスト・デスティニイの思想と九〇年代のそれとは、言葉に於てこそ同一であれ、其の主張者と其の內容とに於て著しい相異がある。ブラット教授が九〇年代のそれを稱して "New Manifest Destiny" と言つてゐるのは、蓋し、new なるものが old なるものゝ其のまゝの再現ではなく、そこに歷史の相異があることを意味するものであると解しなければなるまい。

さて、マニフェスト・デスティニイの復活は一八九八年に於ける帝國主義政策の強行に於て其の頂點に達した。卽ち、此の年、米國はマニフェスト・デスティニイの名に於てハワイを併合し、米西戰爭の結果、强硬な反對論を押し切つてフィリッピンを領有し、曾て continental republic から一躍して兩半球に跨る monarch of seas となつたのである。

然らば、マニフェスト・デスティニイの言葉と思想とは太平洋政策の中にどのやうに現はれてゐるであらうか。

ハワイの併合は決して國初來の政策の變更ではなく其の完遂に他ならず、多年に亙る緊密なる關係の運命的終結であるといふ見解は、國務長官のシャーマン或は上院議員のロッヂらの主張に明白に窺はれるところであるが、[7] 政府や議會の首腦者達の斯かる主張に呼應して、テネシー出身の代議士ギブソン (H. R. Gibson) は一八九八年六月十四日、"Hawaii, the Great Ocean Cross-roads" と題する演說に於て、

> 富、權力、榮譽の三者こそ人間の求むる三大對象であり、此等こそ Vikings が二千年以前に求めた三つのものである……Vikings の精神は今なほ此の土地の中に存してゐる。それこそは吾人民を支配する精神である……マニフェスト・デスティニイとは其の宣言であり其の合言葉であり、其の信仰にして其の鯨波である。而して、斯かる精神と原理とに押し流されて、合衆國の人民は今や新しい方向にさへも進みつゝあるのである。」[8]

と主張し、更に言葉を續けて、

> マニフェスト・デスティニイはハワイ群島を占有すべしと絶叫してゐる……[9]

と大聲叱呼した。更に又、パワーズ博士 (Dr. H. H. Powers) も "War as a Suggestion of Manifest Destiny" なる論文に於て激烈な膨脹主義的感情を煽り、かゝる感情は「吾人の運命をして深く事態の奥底から導き來たるものにして吾人に諾否を言はせぬ力である」と力說した。[10] 反帝國主義を駁して政界を縱橫した若冠三十有餘歲の鬼才ブライアン (W. J. Bryan) を議長とする Trans-Mississippi Congress (一八九七年七月、Salt Lake City に於て開會) に於てさへもハワイ併合が是認されたことは注目に値するのである。

かゝる諸事情の中に在つて、マッキンレー大統領はハワイ併合を何と解したか。彼がマハン、ルーズヴェルト、ロッヂ一派の膨脹主義者の系列に屬さないのみならず本來 moderator であり平和主義者であつて、同時に國内問題の調整を其の主要課題としてゐたといふことは幾多の事實から之を實證することが出來るのであるが（例へば反帝國主義者のシュルツがマッキンレーの大統領當選に盡力したこと）、彼に於てもなほハワイ併合は明白な運命であると考へられたのである。一八九八年六月、彼は部下の一人にその意中を洩らしたが、其のことはコーテルユー(G. B. Cortelyou)の六月八日附の日記に示されてゐる。曰く、「大統領はハワイを得んことに汲々としてゐる。蓋し、ハワイこそは合衆國にとつて最大の利益を招來するところなることを彼は信じてゐるが故である。大統領は二、三日前の晩、予に語つて、『吾人は曾てカリフォルニアを必要としたと同程度、否、それ以上にハワイを必要とする。これこそはマニフエスト・デスティニイである』と言つた」と。[11] 一八四八年のカリフォルニア獲得は continental republic 完成のための不可缺な條件であつたと同時に、それは合衆國のマニフエスト・デスティニイであつたが、時移つて半世紀後の一八九八年の今、カリフォルニアの岸に立つて太平洋の彼方、ハワイに眼を移す時、それは恰も五十年前に於けるカリフォルニアと同程度、否それ以上の重要性を擔つてゐることを思はしめる、そして、カリフォルニア獲得がマニフエスト・デスティニイであつた如く、ハワイ併合も亦それに他ならない、とマッキンレイは考へたのである。彼の此の言葉が單に侵略政策の一つのカムフラージュであるか、又は一個の信念であるか、それは何れであるにしても、彼が此の言葉を腹心の部下に洩らしたといふこと自體が歷史的に問題とされなければならないのである。

マッキンレーが右の言葉を部下のコーテルユーに洩らしたのは六月上旬であつたことに注目しなければならない。卽ち、五月一日、デューイ提督 (George Dewey) がマニラに於て數時間で大勝を博した時の一ケ月後であつたといふ點である。世紀末に於ける米國帝國主義の强行に於て極めて重要な役割を果たす

のは、此のマニラに於けるデューイの勝利といふ事實である。といふのは、肝心な實業界は、當初より明らかに反帝國主義又は吾不關焉の態度を持してゐたのであるが、此の勝利を契機として、前途の好望を豫想し、一齊に帝國主義政策遂行の先頭に立つたからである。（此の問題についてはプラット教授が Expansionists of 1898, Chap. VII. に於て興味深い例證を與へてゐる）比較的漸進的であつた實業界にしてかゝる態度を取つたのであるから、當初より膨脹政策を謳歌してゐた宗教界や又はルーズヴエルト、ロツヂら膨脹論の急先鋒がデューイの勝利を期として一段と帝國主義を唱導するに至つたことは明白である。米國の輿論の有力な部分は、此の戰闘を機として強硬に帝國主義化したのである。從つて、マツキンレーの右の言葉は輿論のかゝる動向と密接な關聯を有したであらうことは想像に難くない。

マツキンレーは當初、膨脹政策には絶對的に反對であり、大統領就任の直後カール・シュルツに向つて、「ハワイを併合すべきではない。予が大統領の地位に在る限り jingo nonsense は斷じて之を行はしめない」と確言してゐる。而も其の彼が嘘てハワイ併合をマニフエスト・デステイニイであると言つたのであるから、彼の右の言葉は、彼本來の信念に出づると云ふよりも寧ろ輿論に流された人の言葉にして、一つの政治的ヂエスチアであると解することも出來る。

併しながら、ハワイ併合に對しては比較的易々として膨脹政策に與したマツキンレーが、フイリツピンの領有に關しては最後まで躊躇逡巡した事實、九八年の秋、米西戰爭の媾和委員達がパリに向つて出發した時でさへ、彼等はマツキンレーからフイリツピンの運命に就いての何等の指令をも受けず、數週間してからやうやく共の通知を得たといふ事實、五名の媾和委員が夫々共の主義主張に於て對立してゐたといふ事實、白堊館に於て毎夜神に祈つたといふ友人達へのマツキンレーの告白の事實（此の告白は矢張り去就に迷つた彼の氣持を示すものであつて、屢々言はれる如き侵略政策の糊塗であると解しない方が妥當である）、など種々の事實を併せ考へて見ると、彼がマニフエスト・デステイニイなる名の下にハワイ併合に向つた態度は、フイリツピンに對する場合とは自ら趣を異にしてゐるものがあることを思はしめる。殊に、米國とハワイとの間に於ける久しきに亙る關係及びハワイに於けるアメリカ人財産の壓倒的多數の狀態（全財産の9/10は白人の所有にして其の3/4は米國人の所有を考へると、マツキンレーのハワイに對するマニフエスト・デステイニイなる言葉を單に一つのカムフラジュであると速斷せしめえないものがあるのではないか。恐らく、マツキンレー自身に於ても、彼の對外政策の解釋者が其の斷定に迷ふが如く、ヂエスチアとも信念ともつかない複雜した氣持を抱いたまゝにマニフエスト・デステイニイなる言葉を用ひたのではあるまいか。

さて、同じ年に運命の思想はハワイの岸に碇泊してゐ

た國家の船をフィリッピンにまで押し進めた。ビアードは米國のフィリッピン政策の考究に當つて、「米西戰爭當時に言はれたことは、事態は何ら舊來の大陸政策に違背するものではない、國家の歷史は膨脹の歷史であり、フィリッピンの征服は此のマニフェスト・デスティニイの一面に過ぎない、といふことであつた」と述べて、[12] 當時の人達がフィリッピンの領有を以て從來のマニフェスト・デスティニイの連續發展であると考へてゐた次第を說明してゐる。卽ち、フィリッピン占有の聲は、「憐れなるフィリッピン人を文明化しキリスト敎化するは合衆國の義務たると同時にマニフェスト・デスティニイである」といふ言葉を以て米國人のヒューマニズムに訴へたのである。そして、こゝに吾々が注目しなければならないことは、マニフェスト・デスティニイの高唱が單にマハン、ロッヂ、ルーズヴェルトといつたやうな膨脹主義の軍人、爲政者に於てのみならず、宗敎界の鐘の音からも極めて顯著に聽き取りうることである。

九八年の冬と春とに Union Theological Seminary に於て試みた "The Christian Conquest of Asia" と題する一聯の講義に於て、バローズ老師 (the Rev. J. H. Barrows) は、米國の商業とキリスト敎とが手を握つて太平洋を橫斷するであらうことを强調し、それがマニフェスト・デスティニイの完遂であると言つた。[13] 或は又、同年 "Manifest Destiny from a Religious Point of View" なる論說に於てモロ族の改宗を力說したのも新敎會のタウンゼント (Luther Tracy Townsend) であつた。[14] そして、宗敎界に於ける斯かるマニフェスト・デスティニイの思想の壓力が、ルーズヴェルト或はロッヂらの運動と相俟つて、しきりにマッキンレーを動かさんとしたのである。[15] 大統領と同じく明らかに膨脹論者ではなかつた國務長官のデイも、如上の膨脹論の壓力の下に、遂にフィリッピンの領有を運命であると解するに至つた。其のことはハワイ併合(七月上旬)の約二十日ほど前、ルーズヴェルトに宛てたロッヂの書簡が雄辯に物語つてゐる。ロッヂは左の如くしたゝめてゐる、「予は最近に於て國務長官のデイ及びマハン大佐と晩餐を共にした。其の際、

フィリッピン獲得の問題に關してデイ氏と二時間に亙り語り合つたが、最後にデイ氏は、『吾人はフィリッピンに於ける吾人のデスティニイを避けることは出來ないであらう』と言つた」と。[16]

ハワイを併合しフィリッピンに進出し太平洋に於て米國が活躍することは國內開發のエネルキーから生ずる明白な運命であるとする思想（マニフエスト・デスティニイの思想の連續性の强調、つまり Manifest Destiny と所謂 "New Manifest Destiny" との同質的結合の思想）は當時しきりに强調された。國民地理學界の副會長マックギー（W. J. McGee）は、「領土的發展への米國の前進は不明なる政策（ulterior policy）より來たるものにあらず、それは常に『明白なる運命（マニフエスト・デスティニイ）』のあらはれである」と言ひ、[17] かのロッヂは、「米國に內在する一法則は太平洋を支配するといふ米國のマニフエスト・デスティニイを米國民に不可避的なものたらしめてゐる」旨の演說を試み、[18] またアウトルック誌（the Outlook）は、マニフエスト・デスティニイ、それは米國の內的な力、卽ち幾世紀もの間、吾種族をば發見者、探險者、移住者或は建設者たらしめて來た力そのものであることを强調した。[19] かゝる諸見解こそは、まさしく、かの著名なる歷史家ターナー（F. J. Turner）の所論と相一致するものである。

一八九三年に「米國史に於けるフロンティアの重要性」なる名論文を發表して米國史學界を驚嘆させたターナー教授は、其の米國史解釋の方法に於けると同樣、彼自身及び彼の著作が共に十九世紀末を研究する史料となるといふ點に於て、極めて注目に値するのである。

ターナー教授は一八六一年、卽ち南北戰爭の勃發した年に西部のウィスコンシンに呱々の聲をあげ、所謂「經濟革命」を經て國力の充實をみた米國が飜て世界政策に發足するに到つた時代を直接經驗し、且つ之を記述したのである。子供の頃、彼は同じく西部出身のリンカーンが一暴徒に暗殺されたのを耳に聞き文字に讀んで痛憤措く能はざるものがあつたであらう。そして、彼は、十九世紀末に於ける米國史の大展開を元氣潑剌たる三十男として、思想の領域に於て歷史の建設に一役買つたのであ

る。彼の著作自體が世紀末研究の一等史料として扱はれうるところに、ターナー研究の二重の、特殊な意義があると思ふ。然らば、彼の諸論文の中には如何なる思想が現はれてゐるであらうか。

一八九六年、當時三十五歳の少壯歴史家ターナーは「西部の問題」と題する論文に於てマニフェスト・デスティニイの思想に言及し、左の如く所見を述べてゐる。

西部人は自國のマニフェスト・デスティニイを信じた。……西部は國家の continental destiny に就いての夢を抱いた。……邊疆人の夢は豫言的であつた。粗野な人であるにもかゝはらず西部人は理想主義者であつた。彼は夢を夢み、幻を書いた。彼は人間に對して信頼をおき、デモクラジイに希望を有ち、米國のデスティニイを信頼し、夢を實現しうる自己の能力を限りなく信じた。[20]

卽ち、ターナーにとつては、「西部こそは何よりも先づ a region of ideal」であり[21]マニフェスト・デスティニイの思想は西部人の限りなき膨脹のエネルギーと不可分の密接な關係にあると考へられたのであるが、而もフロンティア消滅後の問題に關して、彼は、

約三世紀の間、米國の生活の根本的な問題はエクスパンジョンであつた。ところが、斯かる膨脹運動は太平洋岸への移住、自由地全體の獲得を以て阻止されるに到つたのである。併しながら、其のことの故に斯かる膨脹のエネルギーが最早や存せぬと斷ずるは輕率な豫言である。活氣ある對外政策の要求、海上に於て吾々の勢力を復活すべしとの要求、周圍の島々や隣國へ勢力を擴大せよとの要求以上の諸要求は斯かる運動が續くということの標しである。[22]

と述べてゐる。また彼は一九一一年に發表した論文「米國史に於ける社會的諸力」に於て

極西部に植民し其の内部の資源を調整して、十九世紀末から二十世紀に亙り米國民は太平洋の世界政策に從事し、極東を手中に收めんとする方向に進んだ。……斯かる力の伸張……それは決して突發的に生じた問題ではない。洵に、それは或る點に於て、太平洋岸への國民の進軍の論理的結果であり、自由地獲得、西部資源開發に從事した時代に續いて來たるべきものである。」[23]

と結論してゐる。

十九世紀末から廿世紀初頭に亙つて米國史に新解釋を下した歴史家ターナーは、當時の米國社會はフロンティア存續の時代に續くものであり、フロンティアが絶えず

前進してゐた時代に培はれたマニフエスト・デスティニイのエネルギーが今もなほ力強く作用して新しいフロンティアの西進を促してゐる、と考へたのである。此の彼の見解を當時の人達の聲の一端であると解する時、それこそは帝國主義を強行した世紀末を研究する直接史料として重要なる意味を有ち來たるのである。歷史の審判にかける時、マニフエスト・デスティニイの斯かる連續觀には嚴しい批判が向けられねばならないであらう。併しながら、マニフエスト・デスティニイの思想を劍頭臺に上げる前に、吾々は先づ右の連續觀が所謂 'Large Policy' 強行時代の十九世紀末米國にとつて一つの精神的地盤となつてゐたことを明白に認めなければならないのである。

之を要するに、マニフエスト・デスティニイの思想は一八四〇年代には continental expansion 完遂の精神的地盤となり、更に一八九〇年代には全く新しい扮裝の下に oversea expansion の原動力として、ハワイ併合、フイリッピン領有の擡頭となつた。而も其の間に半世紀の歲月を經、その半世紀に於ける目ざましい國家精力の蓄積からして、四〇年代の膨脹のエネルギーは脈々として九〇年代に連がり太平洋の彼方への進軍を論理的にと言つてよいほどに結果するに至つたと考へられたのである。吾々はマニフエスト・デスティニイといふ米國人の限りなき自恃と野心とのドグマが神からの委託として神聖視され帝國主義強行の有力な要因となつたことを認めざるをえないのである。

果して然らば、右の如き海外への膨脹思想の高揚にふさはしいやうな政治的・經濟的發展を十九世紀末の米國は既に遂げてゐたであらうか。經濟問題を例にとつて觀察してみよう。確かに南北戰爭後の經濟的發展は著しかつた。それは「產業革命」といふヨーロッパに於て用ひられた名稱を附されるより以上にむしろ「經濟革命」と呼ばれるのが妥當であるとさへ言はれたほどに（ビアードのつけた名稱）其の發展には目ざましいものがあつた。從つて、米國資本主義の高度な發展から直線的に生じた米國帝國主義の強行といふ見解も一應は考へられうるこ

とである。だが併し、斯かる著しい經濟的發展は同時に國內市場の消費力の著しい增大と不可分の關係にあつたことを看過してはならない。なるほど生產力は夥しく增加した。だが合衆國の輸出は流通しうる生產物總額の十%以上に出たことは第一次世界大戰の時を除いては（一九三〇年初頭まで）未だ曾てなかつたのである。[24] つまり、如何に生產力が增加しようとも、流通しうる生產物の九十%は國內市場に於て消費された譯である。從つてその一事のみを以てしては米國は海外市場への進出を必ずしも焦眉の問題とはしなかつたのである。而も世界貿易に對する米國貿易の割合を觀るに、それも僅か十%程度にすぎなかつた。[25] 其の上さらに、十九・廿世紀の交りに米國が帝國主義政策に突入した地域、つまり極東の貿易額を見るに、それは當時に於て米國の全貿易額の僅か二%程度にすぎなかつた。卽ち、十九世紀末の米國にとつて實際に餘り重要でない對外貿易の中で、極東貿易は其のまた一少部分をしか占めてゐなかつたのである。剩へ、當時に於て海運業が最も低調であつたこと、投資額は僅少にして投資事業も大半は失敗に歸したこと、等々の事實が見られる。[26] 世紀末に於けるかゝる經濟狀態は、同じく世紀末にかくも激烈に擡頭した膨脹思想とどうして不可分に結合することを許容するであらうか。

併しながら飜つて吾々は、少額ではあれ當時の對外貿易額の意味する裏面を檢討してみなければならない。一八九三年の恐慌、三年後すなはち一八九六年に於ける其の恢復、其の翌年に於ける對支輸出額の前年のそれの約二倍（比較的變動のない香港貿易を除くと、一八九六年に六九二萬一九三三弗であつた對支輸出額が其の翌年には一一九二萬一四三三弗になつた）及び爾後の對支貿易額の上昇の傾向、斯かる諸事實はヨーロッパの列强に於ては兎も角、建國以來ほとんど直接的に發展を遂げ來たつた米國人のプログレス的心理に何らかの活力を與へずにはおかないであらう。少額ではあれ一年にして對支輸出額が二倍近くになつたといふことが其のマニフェスト・デスティニイの思想に强く訴へたのではあるまいか。當時の雜誌の論調が、「吾々は實業の繁榮期に入つてゐ

る」、「今日ほど希望ある氣持を抱いてゐる米國民衆は曾てなかつた」と言つてゐる事實は、[27]斯かる推斷の若干の妥當性を認めしめると思ふのである。マニフェスト・デスティニイの思想が經濟界の內幕に潛んで、當時の經濟的發展段階を以てなほ帝國主義強行の具體的條件たらしめたといふ政治性の具有が考へられうるのである。

之と關聯して次に吾々は當時の米國社會の一つの顯著な樣相を一瞥しなければならない。一八九〇年の國勢調査はかのフロンティアが消滅したことを報告した。[28]新大陸發見以來四百年、而して合衆國憲法制定後百年の間、常に政治上の安全瓣、經濟上の安定の保證の妙藥であつたフロンティアが消滅したことは、米國史に於て明らかに一大事件であつた。ターナーがその消滅を以て「米國史の第一期は終つた」と言つてゐるのは必ずしも不當ではないのである。[29]つまりアメリカは最早や機會の別名ではなくなつたのである。現實には其の消滅から生ずる種々の社會問題が直ちに發生することはないにしても、いづれ近き將來には國內の對策は全く新しい方向に於て解決されなければならないであらう。九〇年代に "United States Looking Outward" といふ傾向があらはれ海外への膨脹論が謳歌されたことは、一つには斯かる世紀末十年間の歷史事情を反映してゐるのである。

斯くして、吾々は、米國史に脈々と流れ一八四〇年代に完成された形を以て西へ西への膨脹の精神的地盤となつたマニフェスト・デスティニイの思想が、十九世紀末に於ける米國社會の特異な樣相と當時の海外への經濟的發展の未來性を含んだ在り方へ（少くも米國人には斯く考へられた）等々を背景とし、否、それ自體が斯かる諸要因の內在的な原理として在ることによつて、而して更にそれが當時の世界史の風潮に乘ずることによつて、世界政策の要因をなしたことを認めることが出來ると思ふのである。米國の世界政策への突進が當時の世界史的傾向に棹してゐるといふ事實を認めつゝもなほ、そこに米國的特殊な要因の存することを考へざるをえざる所以である。

【註】

(1) Harper's New Monthly Magazine, LXXXVII (1893), P. 738.

(2) E. Stanwood, A History of the Presidency from 1788 to 1897, P. 496.

(3) J. W. Pratt, Expansionists of 1898, 1936, P. 151.

(4) A. T. Mahan, The Interest of American in Sea Power, Present and Future, 1897, P. 35.

(5) Pratt, op. cit., P. 2.

(6) Harper's New Monthly Magazine, op. cit., P. 737.

(7) 一八九七年に於ける国務長官シャーマンの日本に對する態度 (A. K. Weinberg, Manifest Destiny, P. 261) 及び一八九八年六月に於けるロッヂよりルーズヴェルトに宛てた書簡 (H. C. Lodge (ed), Selections from the Correspondence of Theodore Roosevelt and Henry Cabot Lodge, 1925, Vol. 1, P. 311) などを參照されたし。

(8) Cong. Rec., 55th Cong., 2d sess., (App.,) P. 548.

(9) Cong. Rec, op. cit., P. 549.

(10) Annals of the American Academy of Political and Social Science, XII (1898), P. 181. (Cf. Weinberg, op. cit., P.267)

(11) Charles S. Olcott, The Life of William Mckinley, 1916, Vol. 1, P. 379.

(12)(13)(14)(15) ビアード『アメリカの外交政策』(弘坂氏譯) 九七頁。宗教界が如何に早くから帝國主義政策を支持してゐたかに就いては『ブラット教授の前掲書』"Expansionists of 1898" の第八章 "The Imperialism of Righteousness" に明瞭に論述せられてゐる。其の中で特に興味深く感ぜられたのは『マッキンレーを動かして積極政策を採らしむべく牧師がしきりに國防省又はマッキンレーの家庭を訪問した事實である。そして『キプロ族の改宗に同意をあつたマッキンレー夫人が家庭に於てどの程度までマッキンレーに影響を與へたものあらうか』を讀者に一考せしめる點などに本書の妙味を見る。

(16)(17)(18) H. C. Lodge (ed), Selections, 1925, Vol. 1, P. 313. Weinberg, op. cit., P. 270. Cong. Rec., 56th Cong., 1st sess., P. 2630. なほ此の演説は一九〇〇年三月七日『ロッヂが上院に於て試みたものである。

(19)(20)(21)(22)(23)(24) Weinberg, op, cit., P. 150. F. J. Turner, Frontier in American History, PP. 213—14. Turner, op. cit., P. 214. Turner, op. cit., P. 219. Turner, op. cit., P. 315. ビアード研究室のコラボレーションに從ふ。C. A. Beard, The Idea of National Interest, 1934, P. 245.

(25) Beard, op. cit., P. 249.『一九一三年度に於ける合衆國の貿易の全世界貿易に對する割合は一〇・二%『それは一九二九年までに一四%の增加し『一九三二年に一二%となつた。合衆國の對外貿易及び世界の貿易に如何なる變動があらうとも『商業の

後者に對する割合は一〇%以下に下り一五%以上に上ることはなかつた。」

(26) 其の詳細については、十九世紀末、二十世紀初頭の Statistical Abstract 及び T. Dennett, Americans in Eastern Asia, II. U. Faulkner, American Economic History などを參照されたし。

(29)(28)(27) Pratt, op. cit. PP. 237—38.
Turner, op. cit., P. 1.
Turner, op. cit., P. 38.

四　マニフェスト・デスティニイの思想の限界

然らば、マニフェスト・デスティニイの思想に對しては如何なる審判が下されるべきであらうか。其の判決の根本の據り所は、既に第二章に於て伏線的に考察した如く、此の思想が本來 isolationism に於けるエクスパンションの一表現であり、何よりも先づ continental republic 完成のための特に一八四〇年代的思想であるといふ洵に簡單明瞭な事實に在るのである。「神が與へ給うた此の北米大陸に西へ〳〵と膨脹し太平洋に接する勢力となることが米國民のマニフェスト・デスティニイであるならば、それは一八四八年のカリフォルニアの獲得を以て達せられたのである。當時に於てロウエルの詩が引用され「吾人の運命は高く〳〵山なす山を越えて行く——マニフェスト・デスティニイ、そは海から海にわが領域を擴大する榮譽である」ことが幾多の人達によつて高唱された如く、[1] 米墨戰爭によるカリフォルニアの獲得は單にメキシコに對する勝利であるのみならず、米國の運命の完遂であると信ぜられたのである。されば、O・サリヴアンらの民主黨膨脹論者達が振聲した所謂「神によつて定められた明白なる使命なる」ものは、こゝに其の役割を果たし終つたのである。カリフォルニア以上に西方に其の思想と行爲とを擴大することは、マニフェスト・デスティニイの思想自體の自己崩壞を招來するものであつた眞に四〇年代に於ては、膨脹論者達は米國發展の範圍を北米大陸内に置くことを以て充分に滿足してゐたのである。「吾々は大陸のパイオニアである」、[2]「吾々の使用は大陸と同延である」[3] といふが如き當時の思想と、

當時に於ける米國人のアメリカ外世界への無關心とは、まさしく「北米大陸のアメリカニゼイション」といふことに米國人のエネルギーが悉く注ぎ込まれてゐたことを考へしめるものである。そして、斯かる歴史的事情の下に現はれたマニフェスト・デスティニイの思想と言葉とが、共和黨でなく壓倒的に大陸主義を奉ずる人達によつて支持・高唱されたといふ事實は看過されてはならないのである。

然るに九八年に畫策された "Large Policy" の精神的地盤となつたマニフェスト・デスティニイは、たとひそれが其の時代の人達によつて當來のマニフェスト・デスティニイの再現であると考へられたにしても、まさしくそれはO・サリヴァンが口を極めて罵倒した他の政黨によつて主張されたものであり、コンティネンタリズムの殻を破つて imperial republic へ新發足するための精神的根據として用ひられたものである。四八年のマニフェスト・デスティニイと九八年のそれとの間には半世紀の、否、九八年が十九世紀から廿世紀への自然的、物理的な轉換期である如く、其の間には歴史的に世紀の轉換があると言はねばならない。米國外交史の雄ベミス教授(S. F. Bemis)は其の著『合衆國外交史』に於て、

「北米大陸全體に膨脹することは共和國の明白な運命であるといふ廣く一般に滲つた信念の象徴たるマニフェスト・デスティニイの思想は、之をマニフェスト・オポテュニテイ(Manifest Opportunity)と解するのが妥當である」[3]

と前提し、其の實例としてテキサス、オレゴン及びカリフォルニアの獲得を一考した後、其の著の掉尾に於て、米國の世界政策の强行に嚴しい批判を加へ、

エクスパンジョン——アメリカ國家主義の眞の力——は其のマニフェスト・デスティニイを果たし終へた。卽ちそれは、一大大陸國家を建設せんがために其のマニフェスト・オポテュニテイを利用した後、今や世界に於て「適當な場所を占める」("to take a proper place" in the world)とか「米國青年に達す」("America becomes of age")とかの思想に道を讓つたのである。だが、實際には合衆國は既に一八九八年以前に於て『適當な場所』を占めてゐた。それは北米に於てゞあつた。一八九八年にそれはアメリカ外の世界、精確に言へば「不適當な場所」——利害を異にする國々の相爭ふ國際場裡——に向つて進んで行つた。そして、愚かにも新興日本帝國の道を塞いだので

ある。これこそ米國外交史上に於ける最初の大なる誤謬であつた。[5]

と論じてゐる。洵に、九八年に於けるマニフェスト・デスティニイの思想と行爲とこそは、彼の言ふ如く「大脫線行爲」("a great aberration")であり、[6]「明白な運命」にあらずして「明白な獨斷」であつたと言はなければならない。蓋し、四〇年代に於けるマニフェスト・デスティニイの激發は、地理的・歷史的に明白な運命と稱しうるだけの諸要素を內包した大陸ブロックの完成を目的としたものであり、其の地方は大部分住民がなく米國民が自由に植民しうる地域であり、アメリカ產業によつて容易に開發されうる地域であつたし、更に其の地方は小部隊の陸軍を以て充分に防禦することが出來、ヨーロッパ又はアジアの列强と紛糾を釀す惧れはなかつたのであるに反し、九八年のそれは戰爭と征服をおこなつたといふ點に於てゞはなく被征服地域の位置と性質との點に於て明らかに建國以來の傳統に反し、太平洋に於ける世界列强の利益と衝突し列强の對立をます〳〵深刻、複雜化するが故に、明らかに「明白な運命」とは言ひえないものであつたからである。當時匿名の名評論家ドゥーリ氏(Mr. Dooley)は、「スペインとの休戰の時までに、デスティニイに關する話題は六ケ月以前にはフィリッピンが群島であるか果物の罐詰であるか不明であつたやうな人達によつてさへ語られた」と指摘してゐる。[7]或は又、最近の外交史家グリスウオルド(A. W. Griswold)は、フィリッピン保有論の御先棒を擔いだルーズヴェルト自身が八年も經たないうちに同群島を賣拂はうと考へ、立派な名目さへ立てばフィリッピンを斷念したいと思ふ旨を一友人に語つた事實を擧げてゐる。[8]斯かる一、二の簡單な事實は、太平洋へのマニフェスト・デスティニイの思想に對して果して何を語るであらうか。

既に一八九三年にカール・シュルツはマニフェスト・デスティニイの名に於て彼の所謂「新しい型のマニフェスト・デスティニイ」を批判し、これこそ米國の神聖なる傳統に背叛するものであると論難したが、蓋し、マニフェスト・デスティニイが最早やマニフェスト・デスティニイ

でなく、實は其の形骸であるか又は其の異端であることに歴史の公正にして峻嚴なる審判の手は下らねばならぬのである。併しながら、かゝる脱線に陥つた被告の行爲が、論理的には明白に矛盾そのものであるにもかゝはらず、歴史的には強力なエネルギーとして米國世界政策の一因力となつてゐるといふ嚴然たる事實は之を直視せざるをえないのである、と同時にそれは飽くまで一つの「大脱線行爲」であり、「一つの惡」であるといふ歴史の審判を看過することは出來ないのである。ワインベルグは、「マニフェスト・デスティニイの思想はデスティニイの過程に對して強き反對が生ずる時に最も多くあらはれてゐる」と論じてゐるが、[9]「明白な」とか「不可避的な」とかいふ言葉は先づ第一に惡い條件を蔽はんがためにも用ひられるものであるといふ點に於て、太平洋への米國のマニフェスト・デスティニイの思想に對する批判として蓋し至言と言へよう。一九一五年、大統領ウイルソンは從來の米國の侵略的行爲を解して、それはデスティニイではなくて「吾々の無分別なる若さ」の故であると言つてゐる。[10]其の意は、從來の米國は恰も青年が若氣の誤りから道德的問題を無視して罪に陥る如く、帝國主義を強行したと言ふのであらう。「常に新しいフロンティアに向つて前進して行く人民の偉大なる壓力、新しき土地を求め新しき力を求め處女地の世界の完全なる自由を求めて常に進み行く人民の偉大なる壓力、これが吾々の進路を決定し、吾々の諸政策を恰も一個の運命の如くに思はしめたのである」とは、これまたウイルソンの言葉であるが、[11]なるほど入日に向つて絶えず斧を振る西へ〳〵の膨脹から生ずるエネルギーが米國人をして太平洋に於ける優位を明白な運命であると解せしめたかもしれない。だが併し、エネルギーは運命を創造する極めて不可缺な要素ではあつても——斯かる事實は今次大戰に於て吾々の一樣に感ずるところである——必ずしもエネルギー即デスティニイであるとは考へられない。さればこそネイション誌の一論者は終始一貫して太平洋に於けるマニフェスト・デスティニイの思想に強硬なる反對の意を示したのである。そして、當誌の以下の主張こそは、マ

ニフエスト・デスティニイの思想に對する最も適切な判決として、其のまゝに本稿の結びの言葉として掲げてよいであらうと思はれるのである。

實際には、吾々はデスティニイに關して只一つのことしか知つてゐないのである。卽ち、それはマニフエストでないといふことをである。[12]

【註】

(1) Cong. Globe, 30th Cong., 1st sess., P. 321.

(2) Weinberg, op. cit., P. 121. 一八四五年十一月十五日、「マニフエスト・デスティニイ」と題するニューヨーク朝刊の社說の一節。

(3) Cong. Globe, 40th Cong., 3d sess., P. 339.

(4) S. F. Bemis, A Diplomatic History of the United States, 1936, P. 216.

(5) Bemis, op. cit., P. 803.

(6) Bemis, op. cit., P. 463.

(7) Weinberg, op. cit., P. 269.

(8) グリスウオルド、米國極東政策史(柴田氏譯)、三七頁—三八頁。

(9) Weinberg, op. cit., P. 280.

(10) Weinberg, op. cit., P. 452.

(11) 一九〇二年、アトランテイツク・マンスリ誌に揭載のウイルソンの論文 "The Ideals of America" の中の一節。 Atlantic Monthly, XC, P. 726.

(12) Nation, XCI (1910), P. 464.

「附記」

二十世紀に入つてから、マニフエスト・デスティニイの思想は更に新しい方向に進んだ。「最近の米國史と膨脹主義者達のマニフエスト・デスティニイの思想との間には單に相異があるのみでなくアンテイシシスがある」とワインベルグが書いてゐる如く、二十世紀に於て、それは十九世紀とは逆に反膨脹主義のスローガンとなつた。一九二〇年に於ける大統領ウイルソンの定例敎書はそれを明示してゐる。卽ち、マニフエスト・デスティニイの思想は America's mission of expansion といふことから international stabilization といふことに變つて行つた。斯くして、此の思想は三度び思想的矛盾を暴露し、同時に第一次世界大戰後のウイルソンの平和工作の失敗が示す歷史的矛盾をも暴露した。斯かる二十世紀に於けるマニフエスト・デスティニイの思想の展開について考察することは、これまた興味あると同時に重要なる問題であるが、世紀末米國の太平洋政策の思想的背景といふ本稿の中心問題とは些かかけ離れてゐる觀があるので、其の考察は他日を期したいと思ふのである。

(昭和十八年十二月脫稿　昭和二十年一月加筆)